



南総研だより

1981年 1月 No. 2

第2回 南総研センター研究会

昭和55年7月30日 於農学部513号教室

発表題目 「国連大学水陸相互作用システム研究について」

岩 切 成 郎

国連大学の「天然資源の利用と管理プログラム」のうちで「湿潤地帯村落開発の生態学的基礎研究」があり、その一環として「水陸相互作用システム」とくに「沿岸地域の資源にかかわる研究」が進行している。これまではインドネシアの国立海洋学研究所とボゴール農科大学が主力となって、1979年9月ジャカルタ集会では国連大学奨学制度による自然・社会両科学の約10名の若手研究者が、西ジャワ北岸のデルタ、スワンプ地域をフィールドにした調査の成果を発表し、さらに外国からの客員を加えた一行で2日間のフィールド・ワークを試みた。日本からは筆者が参加した。

1980年に入ってマレーシア、フィリピン中国、日本の各国で国連大学から要請された研究者が研究組織・運営を進め、夫々の課題によ

る調査活動を開始した。日本ではこれまでの研究経歴等から本センター教官による鹿大チームが「石垣島辺地の資源利用・管理について」の研究を受託した。この研究は熱帯湿潤にできるだけ近い自然条件での沿岸地域の生物資源を利用・管理するための基礎調査であるが、同時に他の関係国の共通課題との研究比較、資料交換を行い、とくに研究の方法論ないし調査手法を確立しようとする目的をもっている。

具体的には(1)沿岸地域の地・水質など環境調査、(2)マングロープや魚類などの生物生態調査、(3)土地・海面など資源利用・管理の社会経済調査を石垣島西岸の名蔵湾域で実施中であり、結果の一部はすでに9月中旬の国連大学水陸相互作用調整会議で紹介された。

第3回 南総研センター研究会

昭和55年9月29日 於農学部124号教室

発表題目 「上ビルマの一村落における農耕サイクルと儀礼」

田村 克己

ビルマは、多民族国家であり、そのうちビルマ族固有の居住地は、ビルマ国土の中央を占める平地部である。平地部も、イラワディ川のデルタ地帯を中心とする下ビルマと、ドライ・ゾーンと呼ばれる乾燥地帯の広がる上ビルマでは、自然環境の上でも、文化的な面でも相違が見られる。歴史的にみて、前者は前世紀半ばまで主にモン人・低地カレン人の居住するところであり、英領植民地以後、ビルマ人の移住が盛んに行われ、水稻耕作地帯として発展してきた。これに対して後者は、ビルマ歴代王朝の都の置かれてきたところであり、ビルマ文化の故郷として意識されている。^{注1)} 下ビルマと違って、降雨量も60インチ以下であり、灌漑施設のあるところを除いては、米作・畑作の混合地帯である。ビルマ人の言い廻しに、「下ビルマ人は、ンガピーを食べ、上ビルマ人は、豆を食べる」というのがある。ンガピーは小魚を腐敗させた一種の魚醬であり、下・上ビルマ人の嗜好を表すこの成句は、温潤と乾燥のそれぞれの風土をよく伝えている。

筆者は、1979年3月より1年間、上ビルマの一農村（古都マンドレーより30km余西）^{注2)} にて、村落調査を行った。調査村は、稲作を始め、麦、とうもろこし、南京豆等の豆類・野菜類などが作られ、灌漑施設を持たない上ビルマ

の農村の一典型である。6月頃雨期の到来とともに、耕起・播種等が行われ、雨期あけの10～11月頃に収穫される。村の南側の土地はイラワディ川の氾濫源で、雨期の間、冠水するが、乾期の始まりとともに徐々に水がひき、それに従ってそれぞれの田畑で耕作が行われ、4～5月頃収穫される。このように調査村は、年2回の農耕サイクルを持つが、年中儀礼は一年をサイクルとする。それは、雨期に先立つビルマ暦の新年（4月）に行われる水祭と、乾期の到来を告げる火祭（10月）とに大きく特徴づけられる。他方農耕に関する儀礼は顕著でないものの、水祭の水の掛け合いは豊饒予祝の意味を持ち、2月頃行われるタマネ（粥米に南京豆・胡麻・椰子の実の細片等を混ぜた料理）の儀礼に初穂儀礼の名残りがある。また村のナッには3月に収穫感謝の儀礼が行われ、田植え等の時に田のナッに対し簡単な祈りがささげられる。ナッ信仰はビルマ人の持つ精霊信仰である。仏教儀礼の卓越する年中儀礼の中で、ナッ儀礼は農耕を主たる生業としてきたビルマ人固有の信仰体系や価値観を知る上での重要な手掛りと考えられる。

注1) Huke, R.E., Rainfall in Burma, Geography Publications at Dartmouth, No.2, 1966

注2) 国際交流基金の派遣による。

『南総研紀要』 (Vol 1. No.1)

掲載論文の目次

蟹江松雄：創刊号によせる……………
中尾佐助：南方地域総合研究センターの紀要の発刊にあたって……………

- Hideo TAGAWA, Kenji UESATO, Yusuke SAKATA, Tadamasa KUNIMOTO and Takayuki TANAKA: Expedition of Kagoshima University into Papua New Guinea……………
Prasit BURI : Ecology on the Feeding of Milkfish Fry and Juveniles, Chanos chanos (FORSSKAL)……………
Cesar T. VILLEGAS and Akio KANAZAWA : Rearing of the Larval Stages Prawn, Penaeus japonicus Bate, Using Artificial Diet……………
_____, Teow-LOON LI and Akio KANAZAWA : The Effects of Feed and Feeding Levels on the Survival of a Prawn, Penaeus monodon Larvae.
Hachiro HIRATA, Takafumi MAKITA, A IKEDA, Seiji HIGASHIKAWA, Toru NISHI, Sumihiro ARIMA, T MASUMITSU and Akio HORIWAKI : Distribution Ratio of Useable/Trash Fish Caught by Long-line Fishing……………
Gunzo KAWAMURA, Shiro HARA and Teodora BAGARINAO : A Fundamental Study on the Behaviour of Milkfish Fry for Improving the Efficiency of Traditional Fry Collecting Gear in the Philippines……………
_____, and Yasushi SHINODA : Changes in Phototactic Behaviour with Growth of Milkfish, Chanos chanos (FORSSKAL)……………
八尋正樹：桑冬芽の休眠からみた南西諸島における栽培桑の品種選定条件
[Masaki YAHIRO : On the Selection Conditions of Varieties of Mulberries in Cultivation in the Southwest Islands, Viewed from Dormancy in their Winter Buds.]……………
田村克己：上ビルマの一農村における年中儀礼と二元性
[Katsumi TAMURA : Annual-cycle ceremonies and Dualism in one Village in Upper Burma]……………

「南総研紀要」投稿規定

論文体裁を統一するため原稿の様式を次のように定める。

I 欧文原稿

1. タイプライター用紙左・右の余白は次のようにする。
左辺 4 cm , 右辺 3 cm
2. パイカ字体を用い、ダブルスペースとする。
3. 原稿の様式のうち、タイトル・ページ、文献表、図版説明、図版の柱等の例は南総研紀要 Vol.1.No.1 に示してある。
4. 人名のファミリーネームはすべてスモール・キャピタルに指定する。
5. 論文著者名の漢字名をタイトル・ページの脚注に入れる。
6. 難解の地名は脚注に漢字で示す。
7. ローマ字はヘボン式に統一する。
8. イタリックの指定は著者自身が行う。

II 和文原稿

1. 欧文標題及び欧文アブストラクトをつける。
2. 400字詰横書き原稿用紙を用いる。

第1回 国連大学水陸相互作用システム調整会議

昭和55年9月11日～18日 於鹿児島大学本部第3会議室

上記会議は国連大学の要請により鹿児島大学との共催で実施され、インドネシア、中国、フィリピン、マレーシア、オーストリア、ポーランド、日本の関係機関代表者17名が出席し、各国の研究活動内容報告の後、将来計画、奨学制度、その他について討議した。この会議には岩切成郎教授が出席した

ほか下記のセンター協力教官が報告、討論に参加し、会議の運営は事務局庶務課が担当した。

記

品川昭夫・片山忠夫（農）・茶園正明・井上晃男・平田八郎・片岡千賀之（水産）・田川日出夫（教養）



南総研センター教官

昭和55年8月25日以降、下記の4名が新に参加され、総勢61名となりました。

所 属	転 名	氏 名	専 門 分 野
法 文 学 部	助 教 授	上 村 俊 雄	考 古 学
教 育 学 部	教 授	小 林 孝 子	被 服 学
水 産 学 部	助 教 授	松 田 恵 明	国 際 経 済 学
教 養 部	講 師	鈴 木 英 治	生 物 学

南総研だより No.2 昭和56年1月30日発行

鹿児島大学南方地域総合研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(54)7141 (内線)2053